

まえがき

「ノンエリート」という言葉には、人々の心を何かざわめかせるものがあるのかもしれない。それは何かを否定しようとするニュアンスがこめられていると感じとられるからであろう。しかし、ここでの「ノン」は否定のニュアンスではなく、これまでの生き方の「見直し」であり、これまでとは異なる生き方を「(肯定的に) 引き受ける」という意味で捉えていただくことを、あらかじめお願いしておきたい。

さて、本書における「ノンエリート」の若者たちとは、ひとまずありていに言ってしまうえば「学校の勉強が苦手であった、あるいは成績が良くなかった」人たちの総称である。もっとこの時代の文脈に引き寄せて言えば、「(学力偏差値で評価されるところの) 良い学校、(社会で一般的に評価されるところの) 良い会社」へのルートに(様々な事情で) 乗れなかった人たちのことでもある。

「キャリア」という言葉を「職業経歴」という狭い意味に限定して使えば、この国の「標準的な」(平均的という意味ではなく、人々の多くが目指そうとしている規範的な意味での) キャリアは長らく「良い学校から良い会社へ」という、いわば「エリート」ルートであった。しかし、今日このエリートルートをめぐる時代状況は大きく変わってしまった。それはまずは、ありていに言うノンエリートの若者たちが、エリートルートの最初の入り口である「高等教育」へ進学する機会が大きく増大したことによる。にもかかわらず、エリートルートの次のステップである「正社員就職」は相対的に拡大したわけではなく、むしろノンエリートの象徴ともいえる「非正社員就職」のルートが大きく広がってきた。

このような時代状況のなかで教育現場に急速に浸透していった「キャリア教育」は、依然として「エリートキャリア」のみを標準的なキャリアとして前提に行われている。本書が追究しようとしているのは、エリートキャリアをまったく否定することではなく、またエリートキャリアより価値の劣ったものとし

での「ノンエリートキャリア」を推奨することでもない。どちらのルートを歩もうとも、それなりの「矜持」(自分自身に対する誇り)をもって、言葉のより広い意味での「キャリア」(職業だけでなく人生の様々な「役割」を自分自身の意思で「引き受け」、「形づくる」営為)を追い求めることができるような教育的支援のあり様である。

なお本書でいう「キャリア教育」とは、教科科目的に「キャリア」という言葉が冠せられている授業の内容だけを問うものではなく、上述の広義のキャリアを若者たちに考えさせる契機を与えるすべての教育的要素を総称するものである。その意味では、狭義のキャリア(「就職に役立つ授業」!)とはまったく関係のない専門的・教養的授業科目や、大学のキャリアセンターや若者就労支援機関が主催する各種の「キャリアセミナー」的なものとも関係のない若者支援的な「イベント」や「サロン」も十分「キャリア教育」の範疇に含まれる。

しかしながら、そのような意味でのキャリア教育はまだまだ試行錯誤の段階である。本書は体系的な教育論の提示を意図するものではなく、試行錯誤している「いま・この現場」(自らのキャリア選択にとまどい、動けなくなってしまっている若者たちと日々接している、その時間と空間)からの報告を主としながら、同じような思いを抱えている様々な現場の人々からの共感的理解を求めようとしている。本書の執筆者紹介をご覧になればわかるように、教育を直接の職業としない方々が半分を占めている。広義のキャリア教育の現場は学校の外にも大きく広がっていることを示したかったからである。

執筆者の方々には、私の最初の(実質的な)ノンエリートキャリア教育論である「ノンエリート大学生に伝えるべきこと―『マージナル大学』の社会的意義」(『日本労働研究雑誌』第602号、2010年)を共通の認識としながら、そこでの問題提起に必ずしも捕らわれずに、それぞれの現場からの独自の問題提起をしていただいた。

先に「共感的理解」と述べたように、様々な現場——それは大学だけでなく、高校や中学でもあるだろうし、地域若者サポートステーションやNPO法人などによる若者就労支援機関やさらには地域の一般労組など、教育とは直接的な関わりをもたないところまで広がるだろう——との「同じ思い」を少しでも共

有できればよいと思っている。しかし、それにとどまらず今度はそれぞれの現場からの「批判的な問い」（単なる批判ではなく、本書ではまだ論じられていない新たな問題提起）をぜひ立てていただければと考えている。

本書が従来のキャリア教育に対するノンエリート視点からの新たな「問いかけ」の書となることができれば、この上ない喜びである。

編者 居神 浩